

チャンドラキールティの論理学

著者	吉水 千鶴子
雑誌名	印度學佛教學研究
巻	59
号	1
ページ	411-406
発行年	2010-12-20
権利	日本印度学仏教学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124293

チャンドラキールティの論理学

吉水千鶴子

「チャンドラキールティ (Candrakīrti, 7 世紀) の論理学」とは「チャンドラキールティによる論理学」「チャンドラキールティが用いる論証法」という意味であり、具体的には「帰謬 (論証)」(prasāṅga) と「対論者に成立している (ことにもとづく) 推論」(paraprasiddhānumāna) を指す。チャンドラキールティは *Prasannapadā* (Pr) 第 1 章でバーヴィヴェーカ (Bhāviveka, 6 世紀) による自立論証 (svatantrānumāna) と彼が依拠したディグナーガ (Dignāga, 5-6 世紀) の論理学を批判した。「中観派には自らの主張命題 (svapratijñā) はない」という言明は彼の論理学に対する考えを端的に表すものである¹⁾。しかしながら、「チャンドラキールティの論理学」とはいかなるものか、と問われれば、それは少なくともいくつかの要素に関して「ディグナーガの論理学」と共通するものだと答えるべきではないか。本稿はこの仮説の二つ論拠を述べるものである²⁾。

[1] チャンドラキールティは、ディグナーガが提示した「他者のための推論」(parārthānumāna) を説くための規則と一致する論理的規則に従ってナーガールジュナ (Nāgārjuna, 2 世紀) が *Mūlamadhyamakakārikā* (MMK) 1.1 を提示した、と説明する。

[2] チャンドラキールティが用いる帰謬論証はディグナーガが考える帰謬論証の方法と一致する。

以下、簡潔に説明しよう。

[1] チャンドラキールティは「中観派には自らの主張命題はない」と言いながら、その一方で「諸物は自らより生じない、他よりも生じない、両方からも無因からも生じない」というナーガールジュナの四句否定の言明 (na svato nāpi parato na dvābhyāṃ nāpy ahetutaḥ / utpannā jātu vidyante bhāvāḥ kvacana kecana //) をバーヴィヴェーカに倣って pratijñā と呼ぶ。推測される理由は、これを他者を導くための教説を提示した命題と位置付けるからである。チャンドラキールティは MMK 1.1 の註釈の導入部分に次の説明を与える (Pr 12, 8-14, 1)。

- (1) ナーガールジュナは縁起を理解させようという願いによって (pratipādayiṣā), まず「生起の否定」を説いた。
- (2) ナーガールジュナは「生起はいかなるあり方でもあり得ない」と確定した後 (niścaya), 第1偈を説いた。
- (3) 「自らより生じない」(という句と同様) 他の三つの主張命題 (pratijñā) (の構文) も理解されるべきである。
- (4) 自らの *Madhyamakāvātāra* 6.8 とブッダパーリタ (Buddhapālita, ca. 500) の MMK 1.1 への註釈は, その論証 (upapatti) を提供する。

チャンドラキールティによれば, MMK 1.1 は (3) で言及されるように四句否定の命題 (pratijñā) から成る。それは (1) 他者に縁起の教説を理解させようという願いをもったナーガールジュナが, まず生起がありえないことを確定したのち (2), それを四つの「主張命題」(pratijñā) として示したものである (3)。ナーガールジュナはそれを証明する論理を説かなかったが, ブッダパーリタとチャンドラキールティ自らがその論証を行ったのである (4)。(1)~(3) はバーヴィヴェーカが *Prajñāpradīpa* (Prajñ) で行った解釈とはほぼ同じである。ここに述べられる「(他者に) 理解させようという願い」(pratipādayiṣā), 「確定知」(niścaya), 「主張命題」(pratijñā), 「論証」(upapatti) という MMK 1.1 の教説が提示され, 論証される一連の過程と同じものを, チャンドラキールティは別の個所で他者のために教示をなす際の論理的規則 (nyāya) と呼ぶ。「もし [論者が] ある内容を提示する (pratijānīte) ならば, 自らの確定知と同じように他者にも確定知を起こさせようと欲して (svaniścayavad anyeṣāṃ niścayotpādanecchayā) 自分自身がその対象を理解したのとまさに同じ論証 (upapatti) によって他者に教示すべきであるというのが規則 (nyāya) である。」(Pr 19, 1f.) 下線部分はディグナーガの『因明正理門論』(NM) 13ab, *Pramāṇasamuccaya* (PS) 4.6ab である。この箇所では当規則は論理学者に該当し, 中観派には該当しないと言われるが, 実際には上記のように, MMK 1.1 はまさにこの規則の要件を満たしていることが示されていた。チャンドラキールティが受け入れられないのは svaniścaya の sva- という表現だけである。上述の MMK 1.1 に関する註釈の導入部においても, バーヴィヴェーカは niścaya を述べる際に「自らの確定知の力によって」(rang la nges pa'i dbang gis, *svaniścayavaśāt, Prajñ D48b3) と言うが, チャンドラキールティは類似した文章を用いながらも注意深く sva- を除いている。中観派には自らの学説として何かを肯定的に確定することがないからである。彼はディグナーガを想定対論者として批判を始める最初にもこのことを確認する。ディグナーガ論理学では niścaya は「正しい認識根拠」(pramāṇa) に基

づく。ゆえに他者にそれを教示する場合も同じく *pramāṇa* としての推論 (*anumāna*) を提示しなければならない。しかし、実在を定立するための *pramāṇa* を中観派は認めることはできない。ゆえにチャンドラキールティは中観派に起こる確定知 (*niścaya*) と認識根拠を含めた論証 (*upapatti*) とは世間のみで認められたものであることを述べるのだが、そこで再度 MMK 1.1 の教説に次のように言及する (Pr 57, 5f., 10f.)。

[MMK 1.1 の] 命題 (*vākya*) は世間の人々にとっては、[彼ら] 自身によって認められた論証 (*upapatti*) によって確定されたもの (*niścita*) であるが、聖者たちにとっては [そうでは] ない。(中略) 実に聖者たちは世間と共通の言語慣習 (*lokasamvyavahāra*) によって論証 (*upapatti*) を述べるのではない。他者を覚らせるために、世間のみ (*lokata eva*) で認められた論証 (*upapatti*) を承認して (*abhyupetya*)、まさにそれによって世間の人々を覚らしめるのである。

ここでは戯論 (*prapañca*) を離れた聖者にとっての勝義 (*paramārtha*) が強調されているように見える。実際そうではあるが、注意して見ると、MMK 1.1 が論証 (*upapatti*) によって確定された内容を他者に覚らしめるために述べられた他者のための論証 (*upapatti*) の命題 (ここでは *pratijñā* ではなく *vākya* と呼ばれる) であることを再確認している。中観派は实在論的な考えを否定するのみであり、聖者たちは自ら肯定的に何かを確定することはなく、論証することもないし、世間と共通の論証ももたないが、世間のみで用いられる *upapatti* とそれによる *niścaya*、それを他者に教える *vākya* あるいは *pratijñā* と *upapatti* は使用する。この世間に帰せられる他者のための論証提示の規則とは、実はディグナーガ論理学で用いられていた規則なのである。以上が、筆者が「チャンドラキールティの論理学」と「ディグナーガの論理学」の親近性を指摘する第一の論拠である。

[2] 第二の論拠を述べよう。「チャンドラキールティの論理学」の核である帰謬論証 (*prasaṅga*) である。MMK に対するブッダパーリタの註釈の議論を *prasaṅga* と解釈しながら、チャンドラキールティはそれを中観派独自の論証のように印象付けているが、その方法はディグナーガが簡潔に触れている *prasaṅga* とほぼ同じである。ディグナーガによれば *prasaṅga* は定立的論証 (*sādhana*) ではなく、他者の論駁 (*dūṣaṇa*) である。従って論証因の主題所属性 (*pakṣadharmatva*) が問われることはない。PS 3.14, 17 に言う³⁾。

(14) [対論者の] 主張命題 (*dam bca'*, **pratijñā*) や論証因 (*gtan tshigs*, **hetu*) の観点からある望ましくない帰結が導かれる。それ (= 対論者の主張命題と論証因) に基づいて

[その] 帰結があるから (thal ba'i phyir, *prasaṅgāt) ⁴⁾, これは反駁 (lan, *parihāra) と知るべきである。

(17) 帰謬は主題の属性となるものをもたないので (apakṣadharmatvāt), 先に [対論者が主張命題と論証因とするものの] 承認 (upagama) をなした上で [対論者の] 主張命題や論証因の誤りを述べるので, 論駁 (dūṣaṇa) と理解される。

14 偈の自註に述べられることは NM でも説かれる (北川 1973 : 485, 桂 1978 : 117ff.). そこに引かれる例はヴァイシェーシカ学派によるミーマーンサー学派の音声常住論批判とされるが, その説明はそのまま中観派の帰謬論証にも当てはまるだろう。すなわち, ミーマーンサー学派の「音声は常住である。形をもたないから。」という推論を前提として, この主張と論証因を仮に承認すると, 同様に形のない「行為」(karman) なども常住となり, また音声は「常に認識されるものになってしまう」という二つの誤謬に陥る。このことを指摘して, ヴァイシェーシカ学派は「音声の恒常性」を否定するのである。このように対論者の主張を仮に承認すること (khas len, abhyupagama) にもとづいて, そこから帰結する望ましくない結果を指摘し, 論駁する帰謬の方法は, チャンドラキールティが考える帰謬と基本的に一致している。さらにディグナーガは自註の最後に述べる。「ここで (dam bca' ba tsam gyis, *pratijñāmātreṇa) によって (対論者を論駁して) いるのである。」

ここで考察 [1] に戻ろう。なぜチャンドラキールティは MMK 1.1 の四句否定の言明を pratijñā と呼んだのか。それは帰謬の「主張命題」という意味ではないだろうか。論証因をともなった推論式にのみ pratijñā という語が適用されるのではなく, 帰謬の命題も—ディグナーガが認めるように— pratijñā と呼べるならば, MMK 1.1 を推論式に組み替えるパーヴィヴェーカと帰謬論証に読むチャンドラキールティが共にそれを pratijñā と呼ぶことに不思議はない。

チャンドラキールティがパーヴィヴェーカによる自立論証を批判するのは, 中観派にとって論証の主題は実在しないがゆえに論証因の主題所属性 (pakṣadharmatva) も成立しないことによって基体不成立 (asiddhādhāra) という主張の誤り (pakṣadoṣa), 所依不成立 (āśrayāsiddha) という論証因の誤り (hetudoṣa) に陥り (cf. Pr 27, 8), ディグナーガ論理学の規定による推論式の規定に違反するからである。パーヴィヴェーカの自立論証は結果的にディグナーガ論理学の規則と抵触する。チャンドラキールティが用いる帰謬論証がむしろそれと合致していることに注意すべきであろう。

しかしながら、対論者の主張の論駁方法に関して、チャンドラキールティには受け入れられない規則がディグナーガ論理学には存在した。「両者によって確認されているものを述べるのが定立的論証 (sādhana) あるいは論駁 (dūṣaṇa) であり、どちらか一方に成立するものや疑わしいものを述べるものではない」(PS 3.12cd) という「共通成立」(ubhayasiddhi) の原則である (cf. PS 3.11–12, NM [桂 1977:124])⁵⁾。ディグナーガの議論では、論証因の主題所属性が成り立たないことが両方の論者に認められたとき「論駁」が成立するが、対論者がその誤りを認めなければさらに他の論証が必要になるという意味で述べられており (PSV ad 11 参照)、論証因を必要としない帰謬にはこの原則は妥当しないと考えることは可能である。だが、チャンドラキールティが用いるいま一つの論証、「対論者に成立している (ことにもとづく) 推論」(paraprasiddhānumāna) には抵触する。中観派は対論者が立てる主題や論証因を仮に認めることのみによって推論を立てるので、対論者との間にそれらの共通成立はない。ゆえにチャンドラキールティはこの PS 3.11 に説かれるディグナーガの共通成立の原則を批判的に引用し (Pr 35, 5f.)、両者の承認は不要であることを論じた (Pr 34, 13–35, 9)⁶⁾。「共通成立」の原則に従うならば、実在論者を対論者とする中観派は論争することも論駁することもできなくなる。チャンドラキールティにとってこの規則は是が非でも無効とせねばならぬものであった。彼の議論はルール改正を求めるものと理解できるであろう。仮言的ではあるが論証因を用いるこの paraprasiddhānumāna は、チャンドラキールティの論理学においては、論証因を欠いた論駁のみにすぎない帰謬論証を補う役割を担っている。この推論式こそむしろディグナーガ論理学にはない中観派独自の論証方法なのである。

チャンドラキールティはディグナーガが提唱した「主張命題」(pratijñā) の定義も、「論証因」(hetu) の三条件も、「正しい認識根拠」(pramāṇa) の定義も確かに承認しない。しかし、その「他者のための推論」(parārthānumāna) に関する規則 (nyāya) を中観派も世間のものとして用い、正しい論証 (upapatti) による確定知 (niścaya) にもとづき、他者にも同じ確定知を得させるために命題 (pratijñā) を提示し、論証 (upapatti) を行っていることを示そうとした。その正しい論証についても prasaṅga と paraprasiddhānumāna として明確にした。バーヴィヴェーカのようにディグナーガ論理学の規則に反する論証を提示することを誤りとし、中観派の教義と抵触する「共通成立」の原則には修正を求め、中観派が参画できる論理学の体系構築を試みたのではないかと考えられる。普遍性を追求したディグナーガ

論理学は仏教徒の間の議論のあり方をも変えたのであろう。中観派といえども論理学を共通手段とする学問の市場と論争の場に参加する資格を備え、競争力を高める必要があったのは時代の要請であったと推測される。それはナーガールジュナが批判した方向へ向かうものであることは明らかであった。だからこそ「中観派には自分の主張命題はない」と繰り返せねばならなかったのであろう。

本稿では紙数の関係で、付随する問題をすべて捨象して論じた。注と参考文献の記載も最小限にとどめる。

-
- 1) この言明と意味については筆者を含めた多くの研究者による議論がある。
 - 2) この第一の論拠については第14回国際サンスクリット学会(京都, 2009年9月)で口頭で論じた。
 - 3) 翻訳はKatsura 2009によるサンスクリット語再構成テキスト, チベット語訳と北川訳を参照した。
 - 4) Kanakavarman 訳に従う(Vasudhararakṣita 訳: sbyor ba'i phyir; Katsura 2009: *prayogāi*).
 - 5) PS 3.11 は *Pramāṇavārttikabhāṣya* (Prajñākaragupta, R. Sāṅkṛtyāyana, ed., Patna 1953: 647, 9) に, NM の一文は *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (Dharmakīrti, R. Gnoli, ed., Roma 1960: 153, 19f.) に引用されている。Katsura 2009: 159f. のテキスト参照。
 - 6) ここでバーヴィヴェーカも批判される。バーヴィヴェーカはこの共通成立の原則を承認している (Prajp D182bf.)。

〈引用文献〉

MMK (de Jong, ed., Madras, 1977); NM (T32, No.1628, 桂紹隆「因明正理門論研究 [一], [二]」『広島大学文学部紀要』37, 38, 1977, 1978); Prajp (D3853, P5253); Pr (de La Vallée Poussin, ed., St. Pétersburg, 1903–13); PS (V) (D4203–4, P5700–2); 北川秀則『インド古典論理学の研究』東京, 1973); Shoryu Katsura, “Rediscovering Dignāga through Jinendrabuddhi,” E. Steinkellner, Duan Qing, H. Krasser (eds.), *Sanskrit manuscripts in China. Proceedings of a panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies, October 13 to 17*. Beijing, 2009, pp.155–168.

(本研究は2010年度科学研究費補助金基盤研究(C)の研究成果の一部である。)

〈キーワード〉 チャンドラキールティ, デイグナーガ, 論理学, 中観思想, 帰謬
(筑波大学人文社会科学研究所准教授, Dr.Phil.)